

正宗白鳥『夏木立』論

——あらかじめ失われた理想——

一

東京へ、・・・日清戦争直後から明治三〇年代にかけて、閉塞感漂う村落共同体からの脱出願望と自己実現を果すべく、多くの田舎の青年たちが上京を試みようとしていた。日清戦争は人々に「伝統的共同体社会を超えた権利と義務のひろい世界（国民国家）の一員である」ことを知らしめると同時に「勉強立身価値を内面化していく」契機となった出来事でもあった。その「勉強立身」の足がかりとなる「東京遊学」を果せるのは一部の恵まれた者に過ぎなかったが、自己の「理想」を実現したいという「志」を持った多くの青年を輩出していく時代でもあった。立身出世という欲望に駆り立てられ「大言壮語」を振りかざす上京青年のなかにあつて、ひとりの青年の、ふと漏した次のような呟きによって、この「物語」は出鼻をくじかれることになる。

僕はどつさり金を取らうといふ欲はありません。どうかかうか食うてさへ行けば、一生本を読んで暮らせばえゝです。（二）

正宗白鳥「夏木立」の主人公の「私（守屋猛）」が「東京遊学」のため上京する直前に、立ち寄った大阪の親戚で叔父に語る件である。主人公には世間的な意味での出世欲がまったくなく「どうかかうか食うて」い

伊藤 典文

ければ、「一生本を読んで」暮すことが望みらしい。この「どうかかうか食うて」暮す生活がどのようなレベルなのか、また「本を読んで」はおそらく読書三昧の生活ではなく、教養を身につけ、ものごとの真理を追究すること（具体的には学問の世界）だろうが、あまりにも漠然としている。日清戦後の十八歳の青年の抱く「夢」としては、どこか不安げで身の処し方に戸惑っているふうにも見える。たとえ目的がかなわなくても「大志」を抱くのが当時の多くの「上京」青年だとすれば、「本を読んで暮せばえゝ」と言うかれはどこか自信無さ気で醒めている。その一方で「僕は同級の物に決して負けないつもりです」と自信たっぷり主張する青年である。人好きのしない性分だから世間で成功するかどうかと心配する叔父に対する応えが先の呟きである。かれは人生に対して、計算高い堅実さと用心深さを用意周到に準備するような青年ではない。ただ、生きていくことの心構えが謙虚（ネガティブ）なだけなのである。

さて、正宗白鳥が故郷の瀬戸内の小さな漁村で「東京遊学案内」を読み、キリスト教、古今東西の文学研究、そのための英語学習、さらに観劇を目的に「東京を地上の楽園のやうに夢想して」上京を果したのは明治二九年二月の事である。日清戦争が終った頃で、最初の下宿は牛込の横寺町で、神楽坂にほど近い。当時「神楽坂は、山の手第一の繁華街であつた」^④と回想されるように、賑やかな都会を満喫できる環境で東京での学生生活を始めている。

そんな上京時の自分を材に描いた作品が「夏木立」である。「福岡日日新聞」に大正四年五月四日から七月一五日（七三回）にわたり連載されている^⑤。全八章から成り、主人公の「私」（守屋猛）は十八歳。時は明治二十九年二月下旬から始り（蘇峰の演説会・講演テーマの記述から物語時間特定）約一年半の学生生活が描かれている。白鳥の回想類、書簡等から知られる多くの伝記的事実が散りばめられている。事実、徳富蘇峰、戸川さん（戸川残花）、丹羽さん（丹羽清次郎）、内村さん（内村鑑三）という実名、ないし実名に近い人物が描かれ、また、実名でなくとも、B牧師が植村正久、T先生が坪内逍遙であることは白鳥の回想類を読めばわかる仕掛になっている。だからといって、これは自伝小説ではない。評伝や伝記の側から見れば「夏木立」はこの時期の数少ない資料にはなるが、あくまでも虚構作品として読まれるべきものである。

二

この「夏木立」を、漱石の「三四郎」、鷗外の「青年」とともに、「青春」小説として同じ土俵に乗せたのは作家の中村真一郎である^⑥。田舎から上京した青年の東京生活の第一歩が描かれていることは共通している。しかし、「三四郎」も「青年」も日露戦後という執筆時の同時代を描いているのに対して、「夏木立」は過去の日清戦後の学生生活を描いていることであろう。この日露戦後と日清戦後の時代差は大きい。中村は三作品の主人公には微妙な相違があり、それは「性格の相違ではなく、人生の理想の相違である」とするのは間違ではないが、三作品の主人公たちの比較と読みには若干問題もあり、既にそれに対する指摘もあるので割愛するが^⑦、ただ、実作者（小説家）としての次の評言は傾聴に値するものである。中村は「小説を形式的な仕上げの面で成功不成功を計

ることをせず、どれほど深く現実に突き入っているかを基準として考える」とすると、上の方から、あるいは遠くから青年を見下ろしている『三四郎』や『青年』に比べて、『夏木立』は遙かに青年自身の内面に入りこんで、切実な共感をもって描いている」と述べている。いかなる内面（内容）も形式に左右されないものはないとすれば、やや漠然とした評言だが、言いたい事のニュアンスは伝わる。「夏木立」が、発表時「三四郎」や「青年」ほどに注目されることもなく、またその後も、白鳥の作品のなかにあってもそれほど注目されることなく現在に至っていることを考慮したとき、「内面に入りこんで」とか「切実な共感をもって」とかの一人称語りの描き方への、あるいはまた「形式的な仕上げ」というものが小説にとつていかに重要かつ不可欠であるかを暗に参照しているからである。だからと言って「夏木立」が形式的に、構成的に不成功な作品だったと断言出来るものでもない。

さて、「夏木立」は大正四年に発表されたわけだが、すでに白鳥は第一作「寂寞」（明三七・一一）から「塵埃」（明四〇・二）を経て、自然主義文学の気運に乗りつつ「妖怪画」（明四〇・七）「何処へ」（明四一・一）「五月幟」（明四一・三）「地獄」（明四二・一）等によって、その独自の世界を築いてきたが、その白鳥的世界が文壇に今まさに定着しようという時期に次のような注目すべき文章を記している。

私は十八歳の二月に上京したが、その当座は勉学の傍ら大に体育にもつとめ、柔道もやる遠足もやる、従つて身体が硬く肥つてゐた。それが急に病気に罹つて夏中苦しみ、それが元で遂に今のやうな体質になつた。その時は一命にも及ぶほどであつて、僕自身も屢々長からぬ生命だと覚悟してゐた。しかし、耶蘇教を信じてゐたから心の中には尠からぬ慰藉があつて、却つて今ほどヤキモキしてゐなか

つた。兎に角その病気が僕の一生を定めたもので、読書、学問を好みながらそれに専念一意になれぬのも、記憶力の強かつたのが悪くなつたのも、人並に歓楽を愛し社交を好んだ男が孤独好きで人間嫌ひになつたのも、社会に益もなき不健全な陰気な小説を書くやうになつたのも、皆あの病気から体質の変化を来したためである。

「勤勉にして着実なる青年」(『文章世界』明四二・一〇)

この文章が書かれた明治四二年一〇月、すでに白鳥は「不健全な陰気な小説を書く」作家として、文壇での地位を確立しつつあった時期である。白鳥は「僕の一生を定めた」その原因を「病気から体質の変化を来した」ためと述べているが、それはいくつかの要因のひとつに過ぎないものであろう。ただ確かなのは上京時が「僕の一生を定めた」というほど精神的にも肉体的にも重要な時期であったことである。そんな重要な時期であつたにも拘らず、上京時をモチーフとした作品は「夏木立」に至るまで描かれなかった。それまで白鳥は、同時代を描いたもの(『塵埃』『何処へ』『微光』等)、幼年期を描いたもの(『五月蟻』『二家族』、閑谷校時代(『S塾』『村塾』)や上京前の微陽学院時代(『地獄』)を材とした作品はあるものの、表題が示すような「勤勉にして着実なる青年」の時代を描くことはなかった。しかし、「夏木立」が発表された大正四年というこの年は、前年の大正三年七月に発表された随筆「上京当時の回想」に始まり、この年の「入江のほとり」(大四・四)「一念」(大四・四)「春が来たのに」(大四・五)がそれぞれ発表され、テーマは違ふものの、これら作品に共通するのは「上京」というキーワードである。翌、大正五年は「牛部屋の臭ひ」「死者生者」という傑作を生み、「客観描写法の完成」と大正後期から昭和へと到る「実存的思索を主とする作品」へと向う「作家としての或る分岐点」¹⁰であつたことは認められるが、「夏木

立」はそれとはまったく対照的な一人称語りによる、純然たる過去を甦生するための、白鳥なりのもうひとつの試みではなかったか。新聞連載という形式を踏まえて、過去の回想ではなく、過去の一点に立って一人称語りで主人公を一人歩きさせようとする白鳥なりの試みであつたと推測される。

この大正四年の白鳥に最も詳細な精神的動向を探っているのは瓜生清である。「夏木立」には言及されていないが、『入江のほとり』¹¹試論の中で瓜生清は「出郷者を輩出させる家郷のメカニズムを追究」した「入江のほとり」とは別に、「春が来たのに」の中の一節「彼自身二十年前に初めて上京した時のやうな気持で今一度都会の花の春を見たくなつた」という文章を引用し、それは「かつて精神の昂揚をもたらした上京・修学時代が過去の記憶に遠ざけられている喪失感を苦く反芻する白鳥の率直な心情表現」であるとして、「失われた精神の牧歌の時代に遡行する」上京当時を回想する作品を書かせたとしている。この執筆へのモチーフは、そのまま「夏木立」にも当て嵌まるものである。それも中央文壇ではなく、地方の新聞に連載するという形態が、より「かつて精神の昂揚をもたらした」当時を「牧歌」として率直に表明することにもつながつたと推測される。瓜生清の言う「精神の牧歌」とは「理想」と言い換えてもいいだろう。

では、白鳥にとって「夏木立」のモチーフとなつた二十年前の上京した明治二九年という年は一体どういう年であつたのか。白鳥自筆による年譜には「二月下旬上京。牛込横寺町に下宿した。／早稲田大学の前身たる東京専門学校英語専修科に入学。／夏、大患に罹り臥辱二ヶ月余。」¹²と実に簡潔に記されている。自筆年譜では触れてないが、白鳥の随筆等で何度も回想される夏の帰省前の「基督教夏期学校」¹³を含めると、この年は「上京」「基督教夏期学校」「大患」が大きな出来事であつた事が知

られる。この三つの出来事はそれぞれに、生活の側面、思想の側面、物質の側面という三つの側面からのアプローチも可能だが、白鳥のなかではそれらは渾然一体となって「僕の一生を定めた」ものとして把握されている。大患を来すほどの虚弱体質が生む不安がキリスト教を近づかせ、そのキリスト教の奥義を知りたいという欲求が上京を促したと並列的に述べてしまうと身も蓋もないが、「僕の一生を定めた」というほどの要因が、少なくとも「上京」時期の「牧歌」Ⅱ「理想」にあったことは否めない。その「理想」は、漠然とはしているが、自分を「上京」へと突き動かすだけの強い意志が働いていたことは確かである。漠然と、もやもやの彼方に、つかみどころのない理想が希求されているのである。この「つかみどころのない」藻掻きのなかにこそ、青春の実相が見え隠れしているのである。

「夏木立」には「基督教夏期学校」も「大患」も直接的には描かれていない。しかし、描かれなかった「基督教夏期学校」は、主人公と吉田のキリスト教への対応、「大患」は、主人公の下宿での病氣と吉田の死という「切実」な物語として虚構化されていると読めるのである。

そして、一方で「東京を地上の樂園のやうに夢想して上京した」青春小説として「牧歌」を描くにふさわしく、下宿にたむろする神田界隈の書生たち、隅田川で開かれた運動会や鎌倉への徒歩旅行^⑮など、当時の学生風俗を描こうと苦心している跡も窺えるのである。学生が質入れしていることを大村から聞くと「私には夢にも思はないことだった」(二)と驚きを隠さず、「道を歩いてゐて立派な邸宅を見ると、其処に住んでゐる人々はどんな事をして、こんな家を維持してゐるのかと不思議でならなかった」(八)と素朴な反応を示す主人公の「純真なるもの」「素朴なるもの」から世相を描こうとしている意図も明白である。主人公の成長と躓き、一見、「教養小説」的な装いを呈しながらも一年半という物

語時間の短さによって「教養小説」にはなり得ず、上京時の一時期に凝縮された青春の一齣を理想を追い求める青年に託して描いた「物語」であり、主人公である「私」守屋猛の「僕の一生を定めた」(白鳥)であろう時代とその行く末を描こうと意図されたものである。

三

先にも示したように主人公の守屋猛は「一生本を読んで暮らせばえ」というふうな、学問の道へ進もうとしており、「一生宗教の研究をしよう」か「一生和漢洋の文学を研究しよう」(二)か迷っているようである。その迷いは、単に研究としての宗教か文学かの二者択一なら事はそう難しいことではないのだが、かれが逡巡するのは、宗教というものが研究のレベルに収まらない「信仰」という生き方に直結する「魂」の問題であり、けっして、職業選択の問題ではないことによる。

運動会の後、病氣にかかり、暫く寝込んだ後、ひとりで郊外を散歩しながら、「堅く正しい教理を聴くよりも、人間の哀れを歌った詩や歌を聴きたくなつた。で、宗教か文学かで自分の将来の方針に迷つてゐた私は、この日初めて執るべき道が分つたやうな気がした」(三)と、上京して二、三ヶ月にもならないうちに、文学へと自分の行く末が決つたかの感慨を抱くが、すぐさま「世に神なきの理なしと思ふと共に、数週間教会堂へも赴かず、聖書をも繙かざりしことを悔ゆ」(四)と、書きはじめたばかりの日記に認めてるように、自分の行く末とは関係なく、絶えず宗教(キリスト教)に「魂」が揺れ動いているのである。「僕も胃や脳が悪かつた自分に耶蘇の説教に感動した」(二)と叔父に語っているようにキリスト教は田舎に居る頃からかれの生活の一部にもなっている一種の精神安定剤なのである。^⑯ 守屋猛は田舎でキリスト教を知り、それ

をもっと深めたいという気持はあるものの、信者になることを躊躇っている。躊躇う理由は自分が根っからの芝居好きであることや、芝居（歌舞音曲）等を禁じたキリスト教の戒律に拘束されることへの恐怖である。洗礼後、遊び感覚で教会に行く吉田に対して「僕の理想の教会はもつと厳粛でなくちやいけないんだ」（七）という守屋猛である。かれのなかで、教会は近寄りがたいほど厳粛で崇高なものとして希求されているのである。

そんな厳格さと生真面目さが禍してか、守屋猛の周りにいる知人たちへのかれの反応は極めて冷淡である。一つ違いの叔母の「喜代さん」にも先輩の「大村」に対してもどこか疎遠な感がある。自分の身が不安定で不安であるがゆえの保身とすれば、それはエゴというものであり、キリスト教で最も重要とされる「隣人愛」の精神からもほど遠い。しかし、守屋猛の保身、他者への冷淡は、人間関係における拘束されることへの恐怖からの忌避という側面が極めて強い。また、自分の観念の中で拵えた清きもの、不潔なるもの、あるいは、快、不快の判別があり、それが倫理的「潔癖性」を生み出している。当時のキリスト教が「ピューリタンの伝統と儒教的倫理とが結びついて、その生活規範は極めて厳格」であり「信徒は道徳的に堅すぎるということ嫌われもしたし、信頼されもした」¹⁷ようである。守屋猛は周りにいる喜代さん、大村や吉田、佐川という知人から一目置かれる存在ではあり、信頼はされているのだが、親しみがもてずどこか疎遠な感が否めない。「私」とは対照的な性格の吉田は、女によって身を滅ぼしかねない、親にも友人にも信頼されない、いい加減で不品行な性格だが、「私」から見ると「人の良さ」が禍している「憎めない」奴として描かれ、「私」にとって最も親しみのある友人である。その最も親しみのある吉田にさえも「私」の性格的な属性が疎遠さをもたらしている¹⁸。

守屋猛の生活規範の厳格さは、何度も日課表を作るところにも表れている。

最初の横寺町の下宿から飯田町へ引越したとき「私は新しい意気込みで、一週間の日課表をつくつて、机の前の障子に貼り付け」（四）ている。同時に日記もつけるのだが、その日の日記に、「午後大村来る。夜喜代さん来る。そのために予定の日課を妨げられしを恨む」と早くも頓挫している。二度目の日課表づくりは、吉田とともに下宿していた寺の娘のお花と親しくなり、そのいじらしさから淡い恋心を抱くが、お花は浅草の芸者屋に売られていく。秋風とともに人生の無常を感じる「私」は浅草を歩き「お花のある土地を歩いてゐることが怪しい心を少からず慰め」て帰路につくが、そんな自分に対して「今から下らないことに大切な頭を疲らせるやうぢや東京へ来た甲斐がない」（六）と、急いで帰り、新たな日課表を作る。その余白に「精力を俗事に徒消する勿れ、学業に全心全力を注ぐべし」（六）と大書きしそれを実行しようと決心するが、翌日、「私は日課表の規定より一時間以上も遅く起きたのが気になった」（六）と、またしても実行がともなわないのである。三度目は最初の横寺町の下宿屋に舞い戻り「横寺町へ移ると、私はまた日課表を改めて自ら戒めた」（七）と近くになった教会へ行くようになるのだが、すぐさま教会行きを怠りだす。

このように、守屋猛は滅入りそうになりかけた時や自分を見失いそうになりかけた時など、事ある毎に日課表を作ることで自分を奮い立たせようとしている。しかし、結果は思うようには動いていない。日課表によって自分を律していこうとはするが、律すれば律するほどに、理想と現実の乖離を思い知らされる。「在らねば」あるいは「在るべき」自分を追究することに汲々としている守屋猛は、理想主義者の陥りやすい現に「今在る」自己を喪失している、というよりも、「今在る」自己はま

だ理想の途上で本来の自分ではないということ、より生活の規範に対して厳しさを要求してしまうのである。しかし、日課表を作ろうが計画を緻密に図ろうが、その通りに実現できるような理想は真の理想にはほど遠いのではないか。人は意志して事を成し遂げることは稀で、案外、意志に反して、という場合の方が多いのではないか。現に、守屋猛が現実突き動かされていくのは、かれの意志や計画とは無関係である。キリスト教にとって最も重要な洗礼でさえ、吉田の洗礼というきっかけが必要だったし、再び「専念一意神の教へに遵ひ、学びの道に志さうと決心した」(八)のもB牧師に頼まれた講演筆記(それが活字になった喜び)がきっかけであった。

かれの日課表づくりに表れているような、生活の厳格さや規律の遵守はなにも守屋猛だけの特殊なものではなく、当時のキリスト教を支配していた規範のようなものであった。明治期のプロテスタント教会は「著しく倫理的、社会倫理的な革命思想として」受容され「風俗改良」が伝道の表向きな看板として行われ「一夫一婦制の強調や、禁酒運動を常にともなった」¹³ものであり、芝居を含めた歌舞音曲や男女の交際にも厳しい目が向けられていた。主人公が上京途中の大阪で「耶蘇の説教に感動した」ことを叔父に告げると「兎に角宗教は悪いものぢやない。酒や煙草をやらんだけでも身体にいゝし経済にもなる」(二)と、当時のキリスト教に対する世間一般の受け取られ方の一端が描かれ、また、教会の信者も遊郭に出入りし芝居や寄席に行く吉田を「さも大悪事のやうに非難」するのである。「私」自身も東京で初めて大芝居を見た時の気持を「禁制の木の実を食ふやうな気持であつた。新婚の晩の処女のやうな気持がした。(略)宗教の戒めを破つて、そんな所へ近づくといふことが、一層興味を添へた」(五)のだ。「私」のいう「宗教の戒め」とはプロテスタント教会の歌舞音曲に対する「戒め」である。このように、極めて

倫理的、道徳的な生活思想が守屋猛を規定してしまっているのである。これは当時の「キリスト教が『信』を前提とせず、むしろ如何に生きるべきかという道徳的な規範性で多く把握され」ていたことを示している。主人公の「私」も信仰そのものよりも倫理的な潔癖が生活の規範となっているのである。

四

それでは、「私」にとってキリスト教とは倫理的なものに終始し、何ら信仰とは無縁なものでしかなかったのか。言い換えれば、信仰とは一体、どのような「かたち」を持って主人公のなかで具現化しているかとしていたのか。ほんの僅かではあるが、主人公が求める理想の信仰の「かたち」は垣間見ることが出来る。

帰郷中に吉田の死に遭遇し、その友の死は「私の心に暗い影を投げ」かけ「人間の運命の無惨なのに戦慄」し「人間の寿命の儚なさが他人事として打遣つて置けないやうに胸に染んだ」(七)のだ。そんな事もあって久しぶりに田舎牧師を訪ねる気になり、炎天を冒して基督教講義所に行く。吉田の死を話すと牧師は今日の集りでその事を話してくださいと言われ、聴衆の前に話すことになった。信者の前で話した後、次のように「私」は述懐している。「吉田のやうな行ひをした者でも信者たるがゆゑに神の傍らへ行つてあるといふ牧師の言葉は信ぜられなかつたが、聖書を全部そのまゝに信じて、苦痛も災難も甘んじて受けてるといふ牧師の言葉は如何にも真実らしくて、東京の信者や牧師に見るやうな空々しいところがなかつた」(七)。この「東京の信者」のなかには「私」も含まれている。「私」にとって「信ずる」こととは「空々し」さもなく、一点の疑義もなく「聖書を全部そのまま」信じることに他ならない。

信仰の究極の理想が語られているのである。しかし、「私」に一点の曇りもなく「信じる」ことなどは到底不可能である。それにつづく岡山の孤児院の奇蹟の話がそれを暗示している^④。孤児院で糧米が尽き、百人の孤児たちの食が取れなくなり、院長は皆を率いて操山に上り終日祈りを捧げた。山を降りようとする留守居番が今亜米利加から多額の寄付金が届いたことを知らせた。牧師はそれを「生きた奇蹟の実例」として話すのだが、「私」には「新田義貞が稲村ヶ崎で剣を投げた昔話^⑤と同じやうに、院長だけは寄付金の来ることを予め知つてゐたのではないかと、私は密かに疑ひを挿んだが、決して口には出さなかつた」(七)のだ。

稲村ヶ崎の剣の奇蹟は潮の干満という自然現象に無知であつた山国育ちの新田軍だからこそ起り得た「奇蹟」であり、「無知」がもたらした「信」の力が勝利に導いたわけだが、「私」は「無知」に留まるわけにはいかない。懷疑心と好奇心によつてどこまでも知的であろうとする。おそらく、信じるということは、どこかで「知」を超越し得てこそ可能である。しかし、「私」の上京目的のひとつであつた「宗教の研究」をしたいという願望は、キリスト教を信することよりも、その奥義を「知りたいたい」という願望であり、どこまでも「知る」ことに執着する人間であることを示している。守屋猛の勤勉ぶりは、当然「信」よりも「知」に傾いている。しかし、「知」を限りなく突きつめていったとしてもたどり着けないのが宗教(信仰)なのである。「知」で満たされるようなへっぴりであつたなら守屋猛は初めからキリスト教には近づかなかつただろう。

物語の初めから終りまで主人公は上京を促した「志」とは別にへっぴりの救済を保証するものを求め彷徨うているのである。それを保証するものがキリスト教であつた。

洗礼の後、信者になつても教会へ行くのを怠り、内村先生(内村鑑三)を訪うて、「真に基督に使へる者は世俗的な教会へ行きたくなくなりま

す」し「職業的牧師の説教を聴いて時を潰す間には単純な心で聖書を読め」(七)と勧められて、教会へ行かない自分が正当化されたやうで、それだけで満足してみたり、B牧師に「信者が文学を一生の事業としても差支へない」のかと問うと、牧師は「旧約全書はそれ自身大文学ぢやありませんか。(略)宗教と文学は密接な関係を持つてゐるのですよ」と、励まされると子供のように「動き易い心はその夜眠られないほどに興奮」(八)しているのである。「知」的な部分でかれは誰よりも大人びているが、「知」では収りきれないキリスト教に対座したときかれは実に子供のように素朴な反応を示すのである。

そして「物語」の最後でも、もう一度、何度も日課表を作つたやうに「私」は新たな決意を披瀝するのである。「最早世俗の汚れた娯楽からは一切遠ざかつて専念一意神の教へに遵ひ、学びの道に志さうと決心した」(八)と。花札で親しくなつた友人佐川の娯楽への誘いをきっぱりと拒否して「私は最早こんな友人の所へ近づくことを憚つた。世の汚れから自分を固く守らうと思ひ詰めていた」(八)のである。ここでも「神の教へに遵」うものの「学びの道」へである。けつして「信仰」とは語っていない。そして「固く守らう」と決心はしても「思ひ詰めて」いる限り、それはけつして外へと向わず内へと鬱屈していくだけであることを白鳥は予感させるやうに筆を置いているのである。

「夏木立」には守屋猛の「理想主義者」としての「挫折」は描かれていない。意気揚々として何度も日課表を作つたやうに、新たにその「理想」を実現させようとする強い意志を確認するところで終っている。しかし、挫折を招来するまでもなく、その「理想」はかれにとつては、あらかじめ失われた「理想」ではなかつたか。「奇蹟」を信じた稲村ヶ崎の新田軍の兵士のように、また、聖書をそのまま素直に信じられる信者のやうに、かれらへの羨望をけつして隠すことなく、そういう境地へと

到らないだろう自分をよく「知」っているのである。白鳥は後年、「直ちに信じてその信仰に没頭するのが宗教の極地で、その宗教を研究し検討するのは、それを志した時から、宗教を離れてゐるのぢやないかと思はれることがある」と述べている。これは白鳥から若き守屋猛へ贈られた皮肉をこめたオマージュであると同時に批評なのである。

「知」への志向は懐疑心と好奇心があればこそであり、守屋猛はそこに留まっている。そこがかれの居場所であるかどうかという結論は留保されたまま。そして「信」への志向は「知」とはまったく別の次元へと、自分を突き放さなければ、到底その「理想」とする処へは到らないことをかれは十分すぎるほどよく「知」っているのである。

それ故に、上京前、叔父を前にして呟いた「僕はどつさり金を取らうといふ欲はありません。どうかかうか食うてさへ行けば、一生本を読んで暮らせばえゝです」という言葉が、その場限りの取り繕いではなく、本心からのものであることをそれは示しているのである。

■『夏木立』本文からの引用は全て福武書店版『正宗白鳥全集 巻五』（昭五八・一二 福武書店）を使用。その他の白鳥の文章はすべて同全集を使用。旧漢字は新漢字に改めている。本文引用の後の（ ）の漢数字は「夏木立」の章番号を示す。

注

- ① 竹内 洋『立身出世主義・近代日本のロマンと欲望』（日本放送出版協会 平成九・一二）
- ② 『東京遊学案内』は少年園社から明治二三年からほぼ年一回の割合で発行されている。白鳥は「国民之友」とともに「少年園」を講読しており、同誌の広告で早くからその存在を知っていたと思われる。尚、白鳥が上京する直前の明治二八年度版『東京遊学案内』は「近代日本青年期教育叢書」（日本図書センター 平成四・七）の一冊として復刻されている。

- ③ 正宗白鳥「私の早稲田時代」（『早稲田学報』昭二六・一〇）
- ④ 正宗白鳥「神楽坂今昔」（『新潮』昭二七・二）
- ⑤ 「夏木立」の初出は大正四年五月四日（七月一五日まで七三回にわたり『福岡日日新聞』に連載。初版は大正五年一月一日『夏木立』須原啓興社刊。大正九年六月二五日 第五版では春潮社より刊。函入。大正一〇年九月の新潮社刊の『白鳥傑作選 第一巻』（全四巻）にも収録されている。
- ⑥ 中林良雄「白鳥正宗忠夫伝の試み……研究拾遺（二）」（『論叢』三九号 一九九九・三 玉川大学）は、白鳥の東京専門学校時代の伝記的事実を明らかにし、小説「夏木立」の中の伝記的な部分を詳細に選別している。尚、西洋文学研究者である氏の「西洋文学の受容史のための一つのケイス・スタディー」として始められた「白鳥正宗忠夫伝の試み」は『論叢』誌上で平成七年から続けられており、その正確で詳細な資料分析は、これまでの白鳥伝記・評伝類のなかでは比類のないほどの完成度を示している。磯佳和『伝記考証 若き日の正宗白鳥』（三弥井書店 平成一〇年九月）と双璧を成す。
- ⑦ 中村真一郎『この百年の小説……人生と文学と』（昭四九 新潮社）中村は別のところで白鳥は小説を書くのに「身体を張っていない」という印象を持ったとして「白鳥の、形式主義ともいふべき技巧的構成的作品を読んだ時、私は白鳥が彼の同僚たち（身体を張っている自然主義作家たち）と肌合いを微妙に異にすることを、いぶかつたのだった。私は寧ろ、その頃（私の二十歳頃）文壇の中心に立ちはじめていた横光利一の作風などを、逆に連想した。その印象はその長編『夏木立』を読むことによって決定的になった」（『新潮社版「正宗白鳥全集」月報 附録第一〇号 昭四二・九）と述べている。
- ⑧ 古田義範『夏木立』論考……正宗白鳥に関する覚え書 その八（『富山工業高専紀要』第三巻 昭六三・三） 古田は、中村の「エリット意識そのものに反撥もし、また自分の能力にも疑いを抱いて、恐らく『無用者』としての不遇な生涯に踏み出すだろう」という主人公への予言に対して「やや思い入れの混入した精読」として退けている。
- ⑨ 松原新一は「明治二十九年という年を、私は白鳥にとって殊に重要な

一年であった」として、「神という絶対を受けいれるべきか否かを、いやおうなしに自ら選択すること強いられる、辛い状況のなかに立たされていた」と見ている。「文学にとって思想とはなにか」『沈黙の思想』所収 昭四一・六 講談社

⑩ 大本泉「大正五年の正宗白鳥……『牛部屋の臭ひ』『死者生者』をめぐって」『目白近代文学』第五巻 昭五九・一〇

⑪ 瓜生清『入江のほとり』試論（福岡教育大学紀要）第三十七号 昭和六三

⑫ 現代日本文学全集 第二一巻『正宗白鳥集』自筆年譜（昭四・二 改造社）

⑬ 明治二九年の第八回基督教夏期学校は七月七日から一七日に興津で開催されている。白鳥は「内村鑑三」（昭二四・四）でもこの夏期学校の中に触れているが、晩年にも、「私はこれこそ（内村鑑三の講演を、見のがすべからざるもの、ききのがすべからざるものとして帰省の途中、その興津に立ち寄ることにした」（『生きるといふこと』昭三三・一）と回想している。因みに、内村鑑三の『後世への最大遺物』は第六回夏期学校（明治二七年）の講演録である。

⑭ 吉見俊哉は「一八八〇年代後半から九〇年代前半にかけて普及していた『運動会』は、しかしまだ『遠足』や『行軍』とまったく区別できないもの」で、その実施場所は「海辺や川原、丘、神社の境内であり、内容も行進を主体とする『遠足遊戯』にはかならなかった」と述べている。『運動会と日本近代』一九九九・一二 青弓社 守屋猛たちも早稲田から隅田川まで唄いながら誇らしげに行進している。そして運動競技そのものに興味のない「私」は余興として行われた演劇を観ている。この行進と余興が後の前夜祭、大学祭へと発展していったのだらう。

⑮ 当時、「読書生は大抵同時に旅行家」（柳田国男）であったと言われるほどであった。書生たちの徒歩旅行を容易にしたのは鉄道網の拡充があった。守屋猛たちも、鉄道を利用した遠足（徒歩旅行）を行っている。（拙稿『好奇心の拡張する時代』『明治文芸館』平成一六・三 嵯峨野書院）

⑯ 主人公の「私」・守屋猛は上京前にすでに「二三年前から隣村の牧師について、基督教の教理を聞いて聖書をも読んでゐた」としか記されて

ないが、正宗白鳥は徳富蘇峰の「国民之友」を愛読し、同誌でキリスト教という宗教を知り、岡山の微陽学院（院長・安倍磯雄）で基督教と英語を学び、上京前の一年間は内村鑑三の著書に熱中し、上京後に植村正久に洗礼を受けている。この白鳥の「キリスト教体験」は近代日本のキリスト教を形成した「熊本バンド」（蘇峰、安倍磯雄、組合教会、同志社）、「札幌バンド」（内村鑑三）、「横浜バンド」（植村正久・日本基督教会）という三つの源流が白鳥の体験のなかで見事に合流（信仰や思想としてはなく、人間模様として）している。

⑰ 隅谷三喜男『日本プロテスタント史論』（新教出版社 昭五八）

⑱ 「私」が吉田の郷里を訪問し、吉田が「虎列拉」で死んだことを村人から聞き、かれの実家を目の前にして「そんな悪病の巢へ近寄る気」になれず「吉田の薄運を憐むと共に、自分が遅く訪問したために伝染の危険を免れたことを喜んだ」（七）とある。吉田の死は重たいが自分の身も大事なのだ。尚、吉田の性格づけに関しては三浦敦子「正宗白鳥のキリスト教棄教について……小説『夏木立』を中心に」（『キリスト教文学』日本キリスト教文学会九州支部 第四号 昭五九・六）が詳しい。特に、行き場を失った吉田が郷里へ逃げ帰る前に日曜礼拝に現れ牧師の話熱心に聴いている描写を捉え「すでに吉田には戻り得ぬ世界であるが、吉田の行動には彼を受け入れてくれた者への深い思いが感ぜられるようである」と性格の一面から吉田を救っている。

⑲ 隅谷三喜男『近代日本の形成とキリスト教』（新教出版社 昭二五）前掲の著書と共にこの書は『隅谷三喜男著作集・第八巻』（岩波書店 平成一五・一二）にも収録されている。

⑳ 石田忠彦『信』の深層・断層（叙説）巻七 平成五・二

㉑ この岡山孤児院の奇蹟の話は「内村鑑三」（昭二四・四）や「不徹底なる生涯」（昭二三・五）等でも回想されている。岡山孤児院は社会福祉の父と呼ばれる石井十次によって設立。白鳥も一時期石井の聖書講義を受けている。

㉒ 元弘三（一三三三）年、鎌倉攻めに参じた新田義貞は切通しからの攻めに苦戦していたが、意表をつき稲村ヶ崎の海岸から攻めることに。海岸は馬で通るには深く、義貞は黄金の剣を海に投じて龍神に戦勝を祈願。

するとたちまち潮が引き始める。義貞は潮の干満を利用したのだが、山国育ちの新田軍の兵士たちは、潮の引いたのに驚き、戦意を鼓舞され鎌倉に攻入った、という挿話。

②③ 正宗白鳥「景教の研究」(『文芸』昭一七・一一) 白鳥は最晩年にも同じような感慨を講演で次のように吐露している。「僕はキリスト教信者、田舎の、世を捨てて市井を超脱してゐるやうな、夢をもつてゐる人をいくたりも知っている。さういふやうな境地に自分はない、なるなをもつて生まれてゐない。かへつてへんな知識をもつてきたのが悪かつたのか、小説類を読んだのが害になつたのか。(略)自分で偉さうな考へをもたないで、そこらの凡人と同じやうな身になつたところに、ほんたうの天国の光がくるんぢやないかといふことを感じるがあるんです。」(『文学生活の六十年』[講演]・「中央公論」昭三七・一一)

(編集者)